

講評文:劇団激男vol.4『絶対あいつ宇宙人だけど、りんごは木から落ちる。』

作成者:脇田友さん(スピカ所属・舞台監督・フォトグラファー)

観劇日:2026年1月16日13:00 - (公開ゲネプロ)

脇田 友さん

(スピカ所属・舞台監督・フォトグラファー)



《応援コメント》

林君の瞳はまっすぐ澄んだ黒色をしている。いつもこちらを見る時、まるでワンちゃんのようだ。あまりにもその瞳に存在感があるものだから、それだけで語られる情報量が多い。犬もそうだ。僕の中では、彼は、『猫か犬なら犬顔』カテゴリに入っているくらいだ。

そんな林君が書き下ろした今作は、その澄んだ瞳に似合う、ロマンチズムの塊のようなセリフ群だった。

宇宙と劇場、マクロとミクロを軽やかに行き来しながら、心の中心には、誰かの隣に寄り添いたい（寄り添ってもらいたい）という手触り感。激男なりの恋煩い。林充希のStandByMe。

宇宙は誰をも平等に、愛してくれはしないんだけども、それでも誰かを愛したい。そうささやく彼らと、ぜひ、劇場で会ってみてください。

《講評》

まずは、これからここに書き記す文章は、とても散文的なものになる。なにせ私は、ゲネプロを客席に座って観劇したわけではなく、カメラを2台小脇に抱え、姿勢は常に床面すれすれ低姿勢。アクティングエリアぎりぎりを果敢に攻め、時には、出演者陣の動線を予測しながら舞台の隅っこに入り込んだりもしながら、記録写真を撮影していたのだ。しかも、私の撮影スタイルは、良くも悪くも、被写体である出演者陣が刻む鼓動に、身体をシンクロさせながら撮影するため、あまりクールな目と頭では観れていない。また、講評できるほどの器も文章力も持ち合わせていない。つまり、講評文を書くには不適な人材なのでないかという自認がある。だが、そんなふうにただ自分のハードルを下げるだけでは面白味に欠ける。エンタメ性がない。なので、私なりの視点、書き口で何かを表せられないだろうか。友人として、そして、フォトグラファーとして。そういう考え方から発信していることをご容赦願い、逆に楽しんでいただければ幸いだ。

まず私は、大阪学生演劇祭2024と第10回全国学生演劇祭にて、同劇団の「黄ばみかけの完熟トマト、そこにちょっとのユートピア」を観劇していたため、どうしてもあのクレイジーさ、脳内トリップな見せ方に印象が引っ張られており、今作「絶対あいつ宇宙人だけど、りんごは木から落ちる。」の、ロマンチズムなセリフ群、クールな演技体に驚きを隠せなかった。なんとキュートな芝居なんだと。しかし、よくよく考えてみると、脚本・演出の林充希くんの人柄を思えば、とても自然に受け入れられる気がした。ご存じない方に少しだけ彼の性質をお伝えする

と、完全に「犬か猫なら犬」なタイプ。黒目のうるうるさは、ボーダーコリーのそれ。目だけで彼の表情の殆どが完成していると言っても過言ではない。また、彼はただ人懐っこいだけでなく、その目の奥には、黒々とした炎をいつも滾らせている。そう考えると、どちらの作品も、彼の人柄が両極端に、よく表れていたのだろうと考えられる。そういう風に、作家のパーソナリティから紐解いていくと、ベン図のように、共通する部分を見つけることができた。それは、どちらも「喪失＝埋められない心の穴」がテーマの一つにあるということだ。

今作の舞台は、未来の地球。しかし、発展しすぎた文明や多くの戦争によって、メガソーラーパネルとゴキブリが表面を埋め尽くし、青々とした美しい地球は、ただの黒い球体とかしているらしい。超退廃的。そんな未来の地球の周りを回っている宇宙船の視点から、物語は始まる。登場人物たちは、それぞれがそれぞれに、形の違った孤独を抱えている。男1は故郷に帰れず、男2は故郷を失い、女は、誰かを愛したくても、誰よりも長生きしてしまうために、すべてを喪う未来が決定づけられている。そんな3人は、廃墟となつたラブホテルで身を寄せ合う。悲しいのは、お互いがお互いに孤独を抱えていることが少しずつ分かっていって、それに寄り添ってあげたいと思うのに、寄り添ってもらえたならと思うのに、同時に、その穴をお互いでは絶対埋め合ってあげられないということに、薄っすら気づいてしまっているということだ。食卓を共に囲み、ギター片手にUFOドライブを楽しんでも、心の底のどこかだけは繋がりきれずに、ただ虚しく時間だけが過ぎていく。宇宙船は、自らに搭乗していた「ガガーリン」を(おそらく)愛していた。しかし、ミッションも終わり、ガガーリンは船を降り、宇宙船は広大な宇宙空間に捨てられ、ポソリと独り。彼女は、今や青ではなく黒くなってしまった地球(*1)を見て、ガガーリンを想い、彼の見た青い地球を取り戻そうと、地球にめがけて落下していく。それはまさに、ロミオとジュリエットのよう。どうの昔に亡くなったであろうガガーリンのあとを追いかける。彼女が地球に衝突した結果、メガソーラーパネルやゴキブリが全て吹き飛んだとしても、ガガーリンを喪ったことで空いた心の穴は埋まらない。そんなことは彼女も重々承知しているのだろう。だが、この孤独が一生続き、この先はただゆるやかに下り坂を転げ落ちるだけなのだとすれば、行動せずにいられなくなつたのではないだろうか。上演は、この宇宙空間を漂う宇宙船と、地球のラブホテルで身を寄せ合う3人の視点をマクロとミクロで行ったり来たりするため、セリフに具体的な情報は少ないものの、お互いを補完しあい、「埋められない穴」を際立たせる。また、3人と1機はそれぞれ、「タバコ」「宙(そら)」「炭酸水」「りんご」などの象徴的な物や概念をただ見つめる瞬間が、度々インサートされる。孤独の穴を埋めるように、手慰み。この時、自分の脳裏によぎったのは、大学生の頃の記憶だ。深夜。わけもなく心がざわついて、体が暴れだしそうな時に、決まって自転車で駆け出し、湖の畔に行って水面を眺めたり、公園の草つ原に寝転がって、空に手を掲げてみたりしていたのを思いだした。こう書くと、とても小っ恥ずかしい話ではあるのだが、しかしこれを読んでいる皆さんにも、言い知れぬ不安にどうしようもなくなって走り出した記憶の一つや二つはあるでしょう。そして、そういう心持ちは、どこかちよつと、人には共有できない肌感覚みたいなのがあるはずだ。それが孤独の穴だとすれば、林くんにもきっとあって、「黄ばみかけの～」でも今作でもそれらを描きたかったのではないだろうか。また、全編を通して、セリフはとてもリリカルでロマンチズムに溢れたものになっており、優しく、心地よく投げかけられる。演技体もクールだ。付かず離れず、寄り添うけれども抱き合わない。手を伸ばすけれど繋ぎはしない。舞台美術として、ラブホテルが中央にドンと据えられており、家にも、UFOにも、屋上にもなつて劇空間を豊かにする。デザイン自体もコミカルでおしゃれ。脚本を読む限り、人類は他にもいるらしいが、もうこの地球にはこの3人しかいないんじゃないかなと思わせてくれるのがまたなんとも良い。劇場がもう少し広いところなら、より一層、その静寂と孤独を描けた気もするので、豊岡ミリオン座での公演も観てみたかったところだ。

この物語は、3人が残り少しの日々を最後まで共に過ごし、宇宙船は落下。人類は一度滅亡し、600万年後、最後に取り残されたアンドロイドの彼女は、独り、彼らとの日々を思い出しながら涙を流し、その生命も終わる。

幕を閉じる。なんとも寂しい終わり方だが、林君は、そこまで人と人との営みに絶望しているのだろうか。いや、そんなことはないだろう。ヤマアラシのジレンマのごとく、寄り添いたい、寄り添ってほしい、愛し合いたいを感じながらも、どこか埋め合うことのできない悲しさや、すれ違いに辛く傷ついているのは確かだろう。悲しくなったりもするのだろう。しかし、それでも愛し合うことにも希望を持っているように感じる。ただ、今はそれとどう向き合えばよいのかを、作品を作り続けることで探しているのではないだろうか。宇宙船が、ガガーリンを追い求め、りんご(=地球=知恵の実=愛)に手を伸ばしたように、彼らは今もなお、真の愛を探し続けているのだと思う。宇宙は神の領域であり、誰をも平等に愛し、それはつまり誰をも愛していないということと同義だ。でも、だからこそ地球上に生きる私たちは、愛することだけはどうしてもやめられないんだ。これからも、彼らには探し続けてほしいと願うばかりだ。



(撮影:脇田 友)